

# D-11 共働き家庭に関する研究 (第2報)

山口大教育 森田俊文

目的 本年5月、才ノク回中四国家政学会支部会で発表した才ノ報においては、家事専業家庭、共働き家庭、内職家庭の三群の間で主婦や子どもの意識、子供に対する教師の評価(身体発育、学業成績、知能、性格)などがどのように違うかを見た結果、夫婦共取場に出て働くために特別の不都合はないことを明にした。今回は親子関係がうまくいつているかどうかを三群の間で比較してみたいと考えた。

方法 田研式親子関係診断テスト用紙を用いて山口県下3小学校5年生147名とその父母、3中学校2年生158名とその父母、2高等学校生徒2年生22名とその父母にそれぞれ記入を依頼し集計分析した。これは記入不備を除いた数である。

結果 段階別、三群別に比較すると、小学校では安全関係においては、家事専業が最も高く61.5%、就労群はそれよりやや低いが、共働きと内職との差はあまりない。危険関係においては、共働きが15.8%と最も高いが内職もこれに続き、家事専業が少し低い。中学校では安全関係においてはやはり家事専業が高く67.6%で内職が66.5%、共働きは62.2%と少し低い。危険関係においては、共働きが内職、家事専業に比べやや高く問題がある。高等学校では安全関係において、むしろ就労群が家事専業より高く、内職75.9%、共働き72.2%、家事専業70.6%となった。危険関係においては就労群が家事専業より低く、内職7.5%、共働き8.7%、家事専業10.6%となり、年齢が進むに従い、働く家庭の親子関係が良好になる傾向がみとめられた。